

人生の書『共産主義における「左翼」小児病』に学ぶ

第10回

四国ブロック

事物は内部矛盾により常に運動し続けている

大衆への関わり方は

司会（吉田）…それでは第10章後半に入ります。後半の概要をレポーターの谷口さんから説明をお願いします。

谷口…プロレタリア階級を目覚めさせるのは容易ではないものの、思いがけない、ちっぽけなことがその動機となるために、我々は常に準備活動を行う必要があるということ。大衆のなかに入っていくこと。そして、たたかいは弾力性が需要であり、迂回、協調、妥協など、その場その場で判断しながらプロレタリアート独裁に向けてやり続ける必要性が書かれています。

司会（吉田）…準備活動として、12

3ページに書かれています。共産主義者の党は、自分のスローガンを掲げ、打ちひしがれた未組織貧民の助けを借りてピラをまき、労働者の住居、農村プロレタリアと人里離れた農民の小屋を歩き回り、庶民的な居酒屋に出入りし、平民的な組合、協会、その時々を集まりに入ってゆき、学者ぶらず人民と話をし、いたるところで思想を呼び覚まし、大衆を引き付け、ブルジョアジーの言質をとらえ、あらゆる方法で人民にポリシェヴィズムを知らさなければならぬ、とあります。

高開…革命を起すのは千人、2千人

ではなくて何万、何十万人の人でやる必要がある。そういつた組織づくりも必要であるし、以前に学習した鉄の規律など、どのような組織にするのかも重要です。広大な面積であるロシアで隅々の活動家に正しい情報を伝達する方法は、以前も『イスクラ』（機関紙）だと学びましたが、情報伝達にはスピードも重要だと思いますが、どのようにやっていったのでしょうか。

須藤…ロシア革命当時は、文字を書けない庶民も沢山いました。機関紙の『イスクラ』を使って各地の指導者に伝達し、指導者がそれを人に伝えていく。それを聞いた人がまた他の人に伝

◆ みんなの学習講座



1900年12月1日に第1号が発行された『イスクラ』平均発行部数は8000部であったと言われている。

えていくというような感じです。紙の弾丸とも言われる機関紙を用いながら伝言によって広めていったのです。その意味では今のようなスピード感はありませんが、当時はそのような状況です。

重要なのは階級意識

司会 (吉田) …現代は色々な手段で情

報を得ることができませんが、正しい情報だけでなく間違った情報も取り入れやすい状況にありますね。

須藤…今はデマと言われる情報に溢れているので、その中から正しい情報を取捨選別できる能力、学習や経験からそういった能力を備えておくことが必要です。数千万人という大衆を動かす力は、今はありませんね。その根底にあるのは、大半の大衆が自分たちを労働者だと思っていないからです。

岸本…まさに階級意識ですね。日本の大半を占める労働者でも、政府に対して多くの不満は持っているはずですが、一部の政府に反対する意見に対して、労働者にも関わらず支配者側の立場に立って反論することが多いですね。そこには階級としての意識がないからだということですね。

須藤…やはり階級的な労働組合と社会主義政党が有機的に運動をすすめていくことで、彼らを階級的な労働者とし

て目覚めさせなければならぬのです。そして運動を上げていくためには、活動家一人ひとりに信頼がないといけません。信頼があるからこそ人は付いてくるし運動が広がるのです。

東口…階級意識は今の日本では非常に薄い状況にあります。唯一国会議員のことを庶民から見ると特権階級と呼びますね。でも彼らを妬みこそすれ、その背後に大資本が付いているということころまでは意識できていません。

司会 (吉田) …ではどうすべきかというのが、先ほど冒頭に言った123ページのところだろうと思います。ここに須藤さんの言った機関紙のことも書かれていますね。ただし伝えていくこの方針がしっかりしないと間違った方向にいつてしまします。日常から大衆の中に入り、驕らず話を聞く、学習する必要性があるのだと思います。大西…これはまさに大衆学習運動です。よね。つまり私たちが日々やっている

る運動は間違っていないのだなと感じました。党の指令というのではないにしろ、社会主義をめざしてやっていることには違いないし、まさに同じことを今やっているのだなと。

須藤：当時の機関紙『イスクラ』は、人から人へ回し読みをし、ボロボロになるまで読み継がれました。しかし、今や多くの人がテキストはたくさん持つていても、残念ながら真つ新なままだという現状です。なかなか隅から隅まで読むというのは難しいものです。

それだけ当時は弾圧された環境の中で、社会や資本に対する真実への欲求が強かった。つまり本当の事を知りたいという気持ちが強かったのではないかと思います。昔、元三池労組の塚元さんから「資本主義の粕漬け」という話を聞いた時にびっくりしたのを覚えています。今考えると私たちが普段見聞きしていることは、マスメディアから流される資本側に都合のいい情報はかり

です。

司会（吉田）：私も役場に入庁して最初の労働組合の行く新入部員労働講座で、先輩に「資本主義の粕漬け」と言われて反論しました。「大学行って役場に入って何も問題なく過こしてきた中で、資本主義に悪いことはされてない」と。そこから労働者になって初めて学習を重ねて気付いてくるのです。この（資本主義）社会の矛盾に。

弁証法的考え方とは

東口：129ページの最初の段落からですが、「彼ら（カウツキーやオート・バウアー）がマルクスの弁証法を学んだし、人にも教えた。だが、実践の上では極めて非弁証法的であり、急速な形態変化と古い形式に新しい内容が急速に盛られてゆくことが考えられないほどの連中だった。結果、彼らは弁証法を適用する場合に非常な過ち

を犯した。」とありますが、どのようなことでしょうか。詳しく分かれれば、今も活動家が陥りがちなことではないかと思えます。

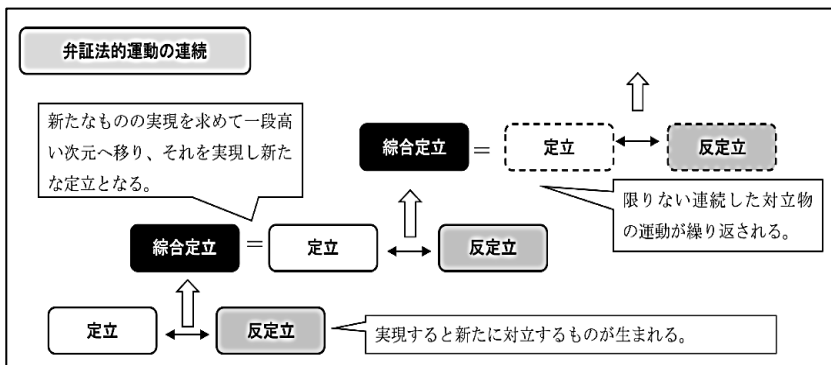
司会（吉田）：極めて非弁証法的であった。古いことばかりにこだわり、現象面の変化に気付かなかった。もしくは考えを変えようとしなかつたということでしょうか。

東口：弁証法を教える立場だったにも関わらずそうだった、というのが重要だと思えますが、私たちが陥りがちで、まず弁証法を理解するのは難しい。そしてそれを実際に適用する場合に気を付けるべきことがここに書かれているのかと思います。

須藤：これは第二インターナショナルの過ちを指摘しています。カウツキーはマルクスの後継者のように言われていましたが、第一次世界大戦に入つた際には一転して自国を守るために戦争国債発行に賛成してしまうのです。つ

◆ みんなの学習講座

まりマルクスの考えを口では発してい



弁証法の運動は、対立物の統一からの量質変化、否定の否定の連続である。

ながら、実践は真逆のことをしたので
す。そういったことを指して「言うつ
たのです。

司会 (吉田) …少し人名訳注を確認し
てみましょう。まずカウツキーですが
、「ドイツの社会民主主義者で、第二イ
ンターナショナルの思想的代表者」とあ
り、第一次世界大戦中は国際主義と排
外主義との間を動揺し、「十月革命以後
は反ボリシェヴィキ的立場を取った」
とあります。次にオット・バウアーで
すが、オーストリア社会民主党の指導
者で、いわゆる「オーストリア・マル
クス主義」の首領。共産主義運動に激
しく反対し、ドイツ・ファシズムのオ
ーストリア占領にイデオロギー的にも
組織的にも協力した、とのことだす。
東口…何でそうなったんでしょう。特
にオット・バウアーはオーストリア・
マルクス主義の首領、ドンなんですよ
ね。にも関わらずどういふことなの？
となりますよね。

竹内…今出てきた、「弁証法」につい
て改めて教えてください。

司会 (吉田) …『社会を変える、自分を
変える』で学んだ私の好きなどころで
す。対立物の統一、量質変化、否定の
否定、らせん状発展ですね。上手くま
とめて説明ができませんが。

須藤…簡単に言えば、物事は常に変化
発展する。そしてその原動力は矛盾で
あるということです。その矛盾の現れ
方として対立物の統一、量質変化、否
定の否定がある。その考え方が弁証法
です。

井角…社会が発展していくことではな
いかと思います。原始共産制から封建
制へ。さらに資本主義から社会主義へ。
それぞれ社会の中で矛盾が出て、それ
が限界を超えたときに次の社会に変わ
っていきます。

司会 (吉田) …弁証法を歴史の発展法
則に当てはめたものが唯物史観 (史的
唯物論) ですね。

東口…以前に中央講座での初代坂牛学長の宿題で、私が初めて奇跡の1000点を取った回答を、少し長いのですが、読ませてもらっても構いませんか。
司会(吉田)…得てして私たちは常に誤ってしまいそうな、重要などころです。ので、お願いします。

事物(自然・社会・認識Ⅱ思惟) 発展の原動力は何か

自然や社会、人間の精神も含めた事物は静止することなく常に生き物のごとく運動している。そしてその運動の原動力は一言で言えばそのものの自体の内部矛盾である。

人類発展の歴史は人間が創り出した生産手段の発展であった。人力から畜力、蒸気力と道具は機械化され産業革命が起こり、その後も火力、電力、原子力と進んできた。では社会や人間の精神を動かす原動力は何か。哲学上最

大の問題とされたこの謎は、それまで人知を超えた神など外部の力によるものとされてきた。しかしながら科学の発展とともに宇宙、自然、人類誕生の秘密が次々と明らかにされるなかで、超自然力や神などという観念論は否定され、弁証法により、もの自体の内部に存在する「矛盾」に求めていくことになる。

変化する現実世界では、ものは外的刺激などの要因も含めその内部では常に矛盾が発生し続けている。ものの内部で相対立する矛盾が発生すれば、それが解消するまで闘争し、より高い次元での統一(止揚)がなされる。この繰り返しが常に起こり、他の外部の運動と相互連関し運動し続けているのである。

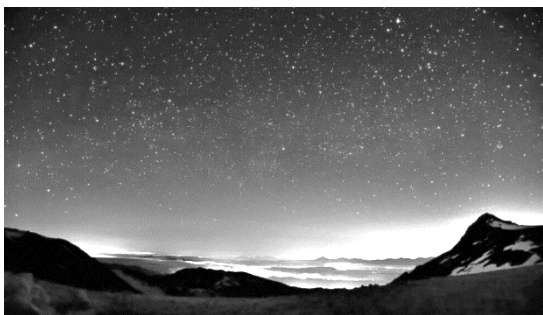
この運動は量的変化が一定の限界に達すると飛躍する。例えば水に熱を加え沸騰すると蒸気になるように飛躍することで量から質が変化する。社会現

象で言えば、封建社会が内部矛盾により変化し革命という飛躍により資本主義社会に転化する。資本主義社会から社会主義社会への質への転化も同様であり、革命により新しい質のもとに生産も発展し、生産力も社会も変化発展する。

また、この運動はある事物が否定され生まれ変わったものがさらに否定されるという円環の形をとって進む。社会で見れば原始共産制社会が否定され階級社会が生まれるが、さらにこれが否定され、階級のない社会主義社会が生まれる。しかしこの新しい社会は階級のない社会でありながらも、原始共産制社会に戻ったわけではなくより次元の高い飛躍・発展した社会である。否定の否定により歴史は繰り返すかのような外見を取るが実際には螺旋状に発展しているのである。

そして人間の脳の運動である精神、意識もまた、これら自然の発展のなか

◆ みんなの学習講座



夜空に輝く星々も、実際にはもう現存していない可能性がある。見えているものがすべてではない。事物は常に運動している。

で生まれ、人間の脳は動物のそれとは異なり、量的発展が労働とともにある段階で飛躍し発展してきた。人間は感覚器官により客観的实在、自然、社会を把握し、それを模写し反映することで精神、意識の運動法則に転化する。人間は实在的世界を認識し、それを基に実践の計画を立て行動することで、その結果を基に修正を繰り返すという、

実践と理論の弁証法的発展によりもの本質に迫り真理に到達するのである。この過程で人間の意識もまた、自己の培ってきた意識と外界との接触のなかで次々と生まれる矛盾との対立を繰り返しながら常に意思統一を行い続けることで発展していく。

自然も社会も、人間の精神をも含めた全宇宙はダイナミックな運動を展開し続けている。その運動は外部の運動と相互に関連し、量から質への転換、否定の否定という螺旋状発展の形をとるが、その原動力はそのもの自体の内部矛盾にあるのである。

東口…以上です。

司会 (吉田)…物事は常に動いている。形而上学的に物事を切り取ってそれがその事物の全てであると決めつけるのは誤りであるという学習を思い出ししました。坂牛学長の顔が浮かびますね。岸本…ますますカウツキーやオット・パウアーがなぜそうなったのかが気に

なりますね。

須藤…カウツキーらはマルクス主義を学習していたし、それを上げる立場にありましたが、ぶれてしまった。その理由は、彼らの中でマルクス主義が知識だけのものであって、思想にまではなっていないということなんです。思想というのはつまり生き方の問題ですね。

司会 (吉田)…改めて私たちは、物事を弁証法的に捉え、古い考えに囚われず、柔軟性を持ちながらたまたかを進めていく必要があるということですね。その意味では彼らの行動やその行動における結果を見ることから、私たちは学ばされることが沢山あったのではないかと思います。

今回で本編は終了となります。残りあと2回となりました。次回からはレインが外国からの追加資料を手に入れることによって、追加で書かれた内容を学習・討論します。